

畠中 博先生のこと

佐 伯 裕 加 恵

「畠中院長はまことに大きい働きをなさいました。戦争中授業数を減らすことはやむを得なかったのですが、キリスト教主義の学校として聖書研究、朝の礼拝を守り続け、その他一般の学力維持のためできるだけのご尽力をなさいました。ああいう非常時に女学院が適当な指導者とえられたことを深く感謝いたしました。」^①

これは神戸女学院第5代院長・デフォレスト先生(Charlotte Burgis DeForest, 1879-1973.)が第6代院長・畠中 博先生(1885-1967)について語られた言葉です。デフォレスト先生は大学部の充実やキャンパスの岡田山移転といった様々な業績を残され、神戸女学院の中興の祖と評されている婦人宣教師ですが、その先生の後を継いで、戦前、日本人初の院長となったのが牧師でもあった畠中先生でした。

デフォレスト先生が1940年に病のため学院を離れてからの、戦中・戦後のミッションスクールにとって最も厳しい時代において、神戸女学院がキリスト教教育を守り、ミッションスクールであり続けるために必要とされ、その期待に見事応えたのが畠中先生でした。先生がいたからこそ、神戸女学院はキリスト教主義女子教育を今日まで続けることができたのです。そういう意味においても、畠中先生は現在の神戸女学院を「創った人」「創立者」の一人と言っても過言ではありません。今年(2017年)は先生の没後50年の節目の年にも当たります。そこで、そんな大きな働きをしながら、公に語られることの少なかった畠中先生のご紹介をしたいと思います。

先生は1885年7月13日、岡山県で生まれました。中学校時代にアメリカンボード(American Board of Commissioners for Foreign Missions)から派遣されて岡山で活動していた婦人宣教師ウェンライト先生(Mary Ellen Wainwright, 1862-1918.)に養育され、信仰に導かれたといひます。そして1902年1月5日に岡山教会でアメリカンボードの宣教師ペティ師(James Horace Pettee, 1851-1920.)から洗礼を受け、クリスチャンになりました。先生が洗礼を受けた岡山教会は1880年10月13日に創立された教会で、その設立には、神戸女学院の創立者の一人であるタルカット先生(Eliza Talcott, 1836-1911.)も深くかかわっていました。

畠中先生は洗礼を受けた後、京都の同志社に進学しますが、1906年に同志社を中退してアメリカに渡り、オベリン大学文学部に入学しました。そして1910年に文学部を卒業した後同大学神学部に入り、1912年に神学部を卒業、按手礼を受けて牧師となりました。その後しばらくアメリカに留まり、ピッツバーグ市YMCA主事として活動しました。

1914年に帰国し、大阪YMCAで宗教部主事として働き、1916年に京都教会牧師に就任、1923年8月に大阪教会の招きに応じて大阪教会の牧師となりました。先生の教会における働きは「大阪教会在任中は組合教会理事として抜群の指導力を発揮した」と評されています。

その牧師としてすでに有名であった先生を神戸女学院が招いたのは、先生が大阪教会転任の翌月のことでした。教会牧師との兼任でもよいという条件で、神戸女学院大学部長(現在の大学長)として来ていただくことになったのです。大学での初めての授業はローマの信徒への手紙を用いたものだったそうです。授業を受けた学生たちは「初めて聖書を読むことの面白さ、楽しさを覚えた」「常に永遠の真理を説き、私共に人類最高の理想を追求せよ、と教えられた」と言っています。^③

畠中先生が教えようとした「人類最高の理想」とは何だったのでしょうか。就任後、最初の卒業式でするはずだった説教の原稿が残っています。当日、病気のため卒業式に出席できなかったので、原稿の全文が同窓生に向けて同窓会

誌に掲載されました。「人生の誠律」というタイトルです。人生最大の目標は友愛を育むことであり、寛容の精神が人の心を開く鍵となる、と説きます。最高の人生とは友として生きることであり、「神戸女学院卒業生諸姉が人類の友として生きる光栄を与へられん事を祈って止まない」と結ばれています。^④

先生の説教には独特の調子と響きがあり、会衆に強く迫り心を動かすもので、先生は影響力の大きい伝道者であったと言われています。神戸女学院では「宗教教育に対する大きな夢と理想」をもって教育に携わりました。

1925年11月に神戸女学院を辞し、教会活動に専念することになりましたが、1927年から1928年まで、神戸女学院理事会の理事長として学校の運営にも尽力くださいました。そんな先生が再び神戸女学院に戻ってこられたのは、1935年2月のことでした。神戸女学院副院長として、学校の教育と共に運営をも担うために。戦前のミッションスクールに対する風当たりが強くなる中、院長であったデフォレスト先生の強い希望で実現したといえます。やはり大阪教会牧師との兼任ではありましたが、デフォレスト先生が不在の間は院長代行を務めるなど、神戸女学院にとって頼もしい存在となりました。1939年に大阪教会の牧師を辞して神戸女学院専任となり、1940年からは病氣療養のため帰国したデフォレスト先生の後を継いで第6代院長に就任、同時に甲東教会の牧師にもなりました。甲東教会は、岡田山への移転後、デフォレスト先生が設立に携わられた教会です。神戸時代、神戸女学院の母教会として神戸教会がありましたので、それに代わる教会としての役割を甲東教会が担いました。^⑤

畠中先生の院長在任期間は1940年から1954年までの15年間に及びます。この間、学校の教育と精神的支柱となり、時には体を張って政府や軍部と対峙してくださいました。1942年春から先生は、アメリカ人教師が引き揚げた後の住宅に移り住み、住宅が軍に徴用されるのを防ぎました。1943年から軍需工場における勤労奉仕が始まり、1945年には校舎の大部分が工場や軍に徴用され、自由に使用できるのは講堂、ソールチャペル、総務館だけとなりました。しかしこ

の講堂で毎週わずか数時間ではありましたが授業が行なわれ、講壇から聖書が下されることはありませんでした。長い間生徒たちが大切に使ってきた廊下や床は毎日出入りする人々の泥靴に踏みにじられ、体育館の床もはがされました。工場の人が教壇でたき火までするのを見つけた畠中先生はさすがに「貴様ら国賊」と怒号したといいます。また、講堂まで工場にすると要求された時には先生はこれを拒否し、ソールチャペルに各教室から運び出された机やいすを積み上げ、徴用されないようにしたりしました。^⑥

こうして戦争が終わりました。先生はいち早くマッカーサーに書簡を送り、神戸女学院がミッションスクールであり、アメリカと密接な関係にあることを述べ、学院に対する友好と理解を求めました。10月、進駐軍の大佐が校舎の明け渡しを命じるためキャンパスにやってきました。当時、進駐軍の命令は絶対的なものでしたが、畠中先生はその日の朝、届いたばかりのアメリカの支援団体、コーベ・カレッジ・コーポレーション(Kobe College Corporation - KCC、現・Kobe College Corporation-Japan Education Exchange - KCC-JEE)からの電報とアメリカンボードからの手紙を見せました。キリスト教主義に則る神戸女学院を今後も支持するという内容のものでした。大佐はこれらを持って立ち去り、二度と現われませんでした。接収は免れたのです。^⑦1948年、神戸女学院は他の大学に先駆けて新制大学になりました。^⑧畠中先生は新制大学初代学長に就任し、戦後の神戸女学院の教育の道筋を示されました。

1954年に神戸女学院を辞した後、先生はハワイ・マキキ教会の牧師となり、1957年帰国後、引退して西宮岡田山で余生を送りました。その間も神戸女学院理事長を永年にわたって務めるなど、最後まで神戸女学院と共にいてくださいました。

「自分が女学院にいるのは神様が鎖でつないでくださっているような気がする。この鎖がなかったらどんなことをしているか分からない、もっと悪いことをいい、もっと悪いことをしているだろう。」

先生はよく冗談めかして語っておられたといします。^⑨

1967年3月12日、先生は81年の生涯を終え、24日に神戸女学院講堂において学院葬が執り行なわれました。教え子である同窓生たちは「先生の内には神によって捕えられ神の栄光のためにのみ働く者としての強い意識と使命感とそれから神のほか何者をも恐れない逞しい信仰とが躍動していた^⑩」と証し、「この場所に特にこの時代につながれて御業を行なわれた先生を偲ぶとき、御摂理の不思議を思う^⑪」と、畠中先生を神戸女学院に遣わされた神に感謝を捧げています。

註

- ① デフォレスト「わが心の自叙伝」神戸新聞、1967年4月27日。
- ② 「天上之友」刊行委員会編『天上之友』第3編、1988年、170ページ。
- ③ 『めぐみ』第56号、1967年12月、22ページ。
- ④ 前掲第4号、1924年8月、付録。
- ⑤ 『神戸女学院百年史 総説』神戸女学院、1976年、212ページ～213ページ参照。
- ⑥ 前掲書262ページ～264ページ参照。
- ⑦ 前掲書273ページ～275ページ参照。
- ⑧ この時認可を受けた私立大学は11あり、そのうち女子大学は5つ(日本女子大学、聖心女子大学、東京女子大学、津田塾大学、神戸女学院大学)。
- ⑨ 『めぐみ』第56号、25ページ。
- ⑩ 前掲23ページ。
- ⑪ 前掲25ページ。

(本稿は2017年5月24日愛校週の礼拝での話に加筆したものである。)